

頭浄土真実行文類二(四)

高田短期大学学長 栗原廣海

一、「南無阿弥陀仏」のいわれ

前回は「大行」について、「称名破満積」と言われている聖人の御自釈を考察しました。この御自釈に続き、聖人は七高僧の論・釈を引用して大行をさらに明らかにしようとしておられます。次の御自釈までの間に引かれる論釈文は、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』、天親菩薩の『浄土論』、曇鸞大師の『浄土論註』、道綽禅師の『安樂集』、そして善導大師の『往生礼讃』、『観経疏』「玄義分」、『観念法門』、『般舟讚』と、おびただしい量に及びます。

その中、『観経疏』「玄義分」から、次の文を引用しておられます。

「南無と言うは、すなわちこれ帰命なり。

また帰説なり、説の字は、税の音なり、悦・税の二音は告なり、述なり、人の意を宣述するなり。命の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。ここをもつて帰命は本願招喚の勅命なり。発願回向というは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまうの心なり。即是其行というは、すなわち選択本願これなり。必得往生というは、不退の位に至ることを獲ることを彰わすなり。『経』には「即得」と言い、釈には「必定」と云えり。即の言は、願力を聞くに由りて報土の真因決定する時刻の極促を光闡するなり。必の言は審なり、然となり、分極なり、金剛心成就の貌なり。

この「六字釈」は、まず、「南無の言は帰命なり」と、『観経疏』「玄義分」の文に従って「南無」とは「帰命」のことであると解説し、その「帰命」が「本願招喚の勅命」であるとの結論へ導く

またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うは、すなわちこれその行なり。この義をもつてのゆえに必ず往生を得。

(南無と言うのは、すなわち帰命である。またこれは発願回向の意味でもある。阿弥陀仏というのは、すなわち衆生が浄土に往生する行である。南無阿弥陀仏にはこのよきな意味があるから、必ず浄土に往生することができるのである)

善導大師は、名号がもつ意義を解釈して、「南無」には「帰命」と「発願回向」といういわれが、「阿弥陀仏」には「行」といういわれがあることを、この文をとおして明らかにしておられるわけですが、聖人は、この善導大師の六字釈に基づき、名号のいわれをさらに詳しく解釈しておられます。それが聖人の、いわゆる「六字釈」です。次のように述べられています。

しかれば南無の言は帰命なり。帰の言は至なり、また帰説なり、説の字は悦の音なり、

ために、「帰」の字と「命」の字を、独自の字訓によつて解説される、いわゆる「帰命字訓釈」と、「発願回向釈」「即是其行釈」「必得往生釈」によつて構成されています。

二、「帰」の意味

「帰」と「命」の釈を先人に学びつつ解釈すると次のようになります。

「帰」とは「至」、つまり「至る」ことである。

そこで「帰」の第一の意味は、「私たち凡夫の心が弥陀の勅命に至り趣く」ということである。

また、「帰」は「帰説」ということでもある。

この「帰説」の「説」の字は、「悦」と同じ意味で、悦服を意味する。そこで、「帰」の第二の意味は、「悦んで弥陀の仰せに服する」ということ、すなわち、「よりのたのむ」(帰説の左訓)ということである。

また、「帰」は「帰説」ということでもある。

この「帰説」の「説」の字は、「税」と同じ意味で、舍息、すなわち「家の中でゆっくり寛いで休

む」ことを意味する。そこで、「帰」の第三の意味は、「弥陀の本願のみこころを寛ぎどころとする」ということ、すなわち、「よりかかる」(帰説の左訓)ということである。

「説」の字には、このように「悦」と「税」の二つの読み方があるが、「説」と読めば、「告げる」「述べる」という意味で、人がその思いを言葉にして述べることであるが、そのように、阿弥陀如来は「よりのため」「よりかかれ」と大悲の喚び声を衆生に伝えてくださるのである。

以上のように理解することができるでしょう。「帰」を「帰説」とし「帰説」とする解釈は、中国最古の詩集である『詩経』によっておられるようです。その解釈をおして、「帰」とは、凡夫の心が弥陀の勅命に至り趣き、よりのんで悦んで弥陀の仰せに服し、よりかかって弥陀の本願のみこころを寛ぎどころとすることであるとされるとともに、そのことが、凡夫の意志によってなされるのではなく、ひとえに、「よりのため」「よ

続いて、「命」は「使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり」とされます。「使」とは、使役の意味で、「そうせしめてくださる」はたらき、すなわち阿弥陀如来が凡夫をして、救済してくださるはたらき、「教」は「教命」、すなわち阿弥陀如来が自ら教えてくださること、「道」は、衆生が生死を超える大道のことで、二河白道に説かれる「願力の白道」のこと、「信」は「真実」で阿弥陀如来のみ教えに嘘偽りのないこと、「計」は「はからい」で、種々に善巧方便してお救いくださる弥陀のおはからいのことです。「召」は「召す」ということで、弥陀如来が私も凡夫を浄土に召してくださっていること、直ちに來たれと呼び寄せてくださっていることをあらわしています。

四、本願招喚の勅命

以上のように、聖人は、「帰」と「命」の二字の意味を詳細に検討し、そのいずれもが、阿弥陀如来の勅命であることをあらわしているとされた

りかかれ」と私たちに喚びかけ、導いてくださる弥陀大悲の勅命によるものであることが示されています。

三、「命」の意味

次に、「命」とは、「業」であり、「招引」であるとされますが、これは『尊号真像銘文』の次の文にわかりやすく示されています。

真実信をえたる人は大願業力のゆえに、自然に浄土の業因たがわずして、かの業力にひかるるゆえにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきわまりなしとのたまえるなり。しかれば「自然之所牽」と申すなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。これを「牽」といふなり。「自然」といふは行者のはからひに

あらずとなり。すなわち、「業」とは「大願業力」で、阿弥陀如来の衆生救済のはたらきのことです。その業力は、衆生を無上大涅槃へと招き、引くはたらきであるから「招引」であるとされているのです。

のです。そこで、「ここをもって帰命は本願招喚の勅命なり」と述べて、いわゆる「帰命字訓釈」を結ばれるのです。

「帰命」とは、本来サンスクリット語の「ナムス」の訳語で、その音写が「南無」です。その一般的な意味は、「身命を投げ出して仏の教えに従うこと」であり、衆生の意志・計らいに基づく仏道を意味する言葉ですが、聖人はその行為の主体を衆生から如来に転換し、「帰命」とは、「まかせよ、必ず救う」と喚びかけてくださる如来の勅命であるとされたのでした。

『尊号真像銘文』に、「帰命と申すは如来の勅命にしたがうこころなり」と言われ、「帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて召しかなうと申すことばなり」と言われているのは、よりのみ、よりかかることができるのも、帰命せよとの如来の、決して捨て給わない決意の喚び声があるからであることが明らかにされていると言えるでしょう。